自閉スペクトラム症児における動作模倣の促進について

－フルガイダンスと段階的プロンプトの効果の比較－

○王旭　　雨貝太郎　　裴虹　園山繁樹
（筑波大学大学院人間総合科学研究科）　（千葉経済大学短期大学部）　（筑波大学人間系）

KEY WORDS: 自閉症　動作模倣　ガイダンス

Ⅰ．目的

模倣スキルは言葉や概念などを学習するために必要不可欠なものである。しかし、自閉スペクトラム症児は定型発達児に比べ、模倣スキルが低いと報告されている（加藤・安井，2013）。動作模倣における先行研究においては、模倣をしない際に様々なプロンプトを提示している。しかし、プロンプトの種類に関する比較研究はほとんど見られない。そこで、本研究では重度自閉スペクトラム症児１名に対する模倣訓練において、2 つの条件（フルガイダンス条件、段階的プロンプト条件）を行い、模倣スキル促進の効果について比較検討した。

Ⅱ．方法

1．対象児

自閉スペクトラム症の診断を受けた男児１名であった。指導開始時の生活年齢は 3 歳 11 か月であり、4 歳 1 か月時に行った新版 K 式発達検査 2001 では DQ37（姿勢-運動 76、認知-適応 37、言語-社会 22）であった。4 歳 3 か月時に行った CARS では重度の自閉症であった。中国生まれで 3 歳 5 か月時に来日し、両親は家庭では中国語を話していた。指導開始時点で、動作模倣のスキルは未獲得であった。

2．研究期間と指導場面

X 年 6 月～X+1 年 4 月の 10 か月間であり、週 1 回 60 分の教育相談のうち約 10 分行った。

3．手続き

1 セッションあたり、各条件を 10 試行ずつ、計 20 試行行った。セッション 1～10 では、SetA の 10 種類の動作をフルガイダンス条件で行い、SetB を段階的プロンプト条件で行った。セッション 11～20 では、条件を交代して実施した。セッション 21～30 および、31～38 も同様に交代して実施した（Fig.1 参照）。

セッション	1～10	11～20	21～30	31～38
Set A	フル	段階	フル	段階
Set B	段階	フル	段階	フル
条件	条件 1	条件 2	条件 1	条件 2

Fig.1　セッションによる条件

2 つの条件ではともに、MT と本児が向かい合って座り、注意を引き付けてから「まねっこ」と言い動作モデルを示した。正反応には身体強化と言語称賛を行った。誤反応や無反応に対しては、条件ごとに本児の後ろに座っている ST が以下に示すプロンプトを行った。

①フルガイダンス条件

3 秒後に、ST がフルガイダンスを行った。

②段階的ガイダンス条件

3 秒後に MT は動作モデルを再提示した（2 回目の提示）。それでも、模倣しない場合は、さらに 3 秒後に ST が本児の肘を軽く押した。それでも模倣しない場合は、再提示し（3 回目の提示）、その 3 秒後に ST が本児の腕を持って途中までガイダンスした。それでも模倣しない場合は、再提示し（4 回目の提示）、その 3 秒後に ST がフルガイダンスした。

【動作項目】

Set A：手を叩く、両手を横、両手を前、両手をふくらはぎ、両手を頭、両手を肩、両手をグー、両手で×、両手を膝、両手で肩にクロス

Set B：グーで叩く、グーでバンザイ、両手をパー、両手で耳、両手でバンザイ、両手を腰、両手をお腹、拳でトントン、両手を頬、お休みポーズ

Ⅲ．結果と考察

2 つの条件で行った指導を通して、対象児は Set A と Set B の動作項目を模倣できるようになった。

セッション 1～10 において、フル条件の正反応率の平均値は 68%で、段階条件の正反応率の平均値は 45%であった。セッション 11～20 において、フル条件の正反応率の平均値は 32%で、段階条件の正反応率の平均値は 44%であった。セッション 21～30 において、フル条件の正反応率の平均値は 77%で、段階条件の正反応率の平均値は 73%であった。セッション 31～38 において、フル条件の正反応率の平均値は 80%で、段階条件の正反応率の平均値は 73%であった。全体的には、段階条件の正反応率がフル条件より高かったが、2 つの条件の間の差がだんだん少なくなった。それは、子どもの模倣スキルが未獲得から習得の過程の影響を受けたと考えられる。また、同じ動作項目において、習得した後に段階条件では正反応が出やすくなった。この結果から見ると、フル条件で未習得の動作、または子どもには難しい動作を学習させ、その後に段階条件ですでに習得した動作を安定させた方がスムーズであると考えられる。

本研究は、実施期間が限られたため、実施した動作項目は 20 個しかなかった。また、対象児の人数も 1 名だった。今後、多数の対象児に多数の動作項目の実施を通して、2 つの条件の比較及び維持・般化について検討する必要がある。また、他の事例での再現が求められる。

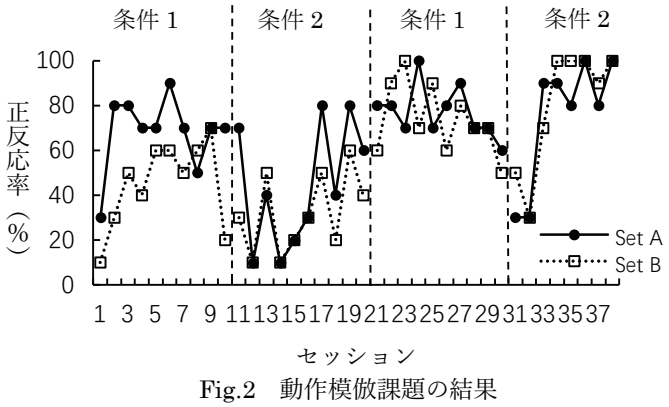

Fig.2　動作模倣課題の結果

Ⅳ．文献

加藤琢也・安井友康(2013)知的障害を伴う自閉症生徒に対する動作模倣に着目した運動指導の方略:授業実践と評価の分析から.北海道教育大学紀要:教育科学編,64(1),71-79.

(WANG Xu, AMAGAI Taro, PEI Hong, SONOYAMA Shigeki)